■抄録

レクチャー 3「クィア神学概論」

講師：工藤万里江氏

2024 年 1 月 21 日（日）京都芸術センター

さまざまな学問の知見を参照しながら他者理解の問題を考えることを目的とした連続レクチャー「ひとはひとと、いかに向き合いうるのか」。第 3 講目では、キリスト教とジェンダー／セクシュアリティの交差を研究対象とする工藤万里江氏（立教大学ほか非常勤講師）がクィア神学の基礎について講義を行った。

工藤氏はまず日本においてキリスト教徒は人口の 1%にも満たないマイノリティであること、キリスト教研究自体があまり社会一般の興味を引くものではないこと、自身の研究するフェミニスト神学やクィア神学がその中でもさらに周縁に位置することを説明し、企画

者である山田創平氏から講師の依頼を受けた時の率直な驚きを語った。その上で、プログラム全体の趣旨やナオミ・リンコン・ガヤルド氏の作品をつぶさに見ていく中で「実はすごく私がやっていることと根底でつながることがいろいろあるんじゃないか」という気づきがあったと話した。

工藤氏が探求しているのはキリスト教とジェンダー／セクシュアリティがいかに交差するのかという問いだが、そもそもキリスト教と性にはどのような関係があるのか。工藤氏ははじめに、約 2 千年前に生まれたキリスト教がやがてローマ帝国の国教となり権威と結びついていったこと、またのちにヨーロッパ諸国がアメリカ大陸やアフリカ大陸などを侵略し支配する中でキリスト教を広めていった歴史を振り返り、同宗教が広範な時代と地域にまたがる非常に多様な営みであることを解説した。工藤氏は「本当に同じ宗教なのかと思えるくらい、実は本当にバラエティに富んだ言説実践がこのキリスト教と呼ばれるものの中には含まれて」いるとことわった上で、その中でもローマ・カトリックやプロテスタントの主流の教派では非常に保守的な性規範が保持されてきたと話した。この性規範の要点を工藤氏は、①男女二元論（神は人間を男と女という本質的に異なる種類の存在として作ったという考え）、②男女相互論（男と女は互いに補完し合うものだという考え）、③男性優位思想（男が人間の原型＝より神に近い存在であり女は補助役であるという考え）、④生殖中心主義（神は人間が子孫を作り繁栄することを創造の秩序にしているという考え）の四つにまとめる。工藤氏は、これらの性規範が同性愛や中絶、避妊、婚姻外・婚姻前の性交渉を罪とみなすことで同性愛者の人権や特に女性のリプロダクティブ・ライツを侵害する問題の多いものであることを指摘した。20 世紀末から 21 世紀にかけて世俗の社会ではジェンダーやセクシュアリティをめぐる認識に大きな変化が見られたが、キリスト教の保守的な性規範は「聖なる領域」に留め置かれ、温存されたと工藤氏は言う。このことは、フェミニズムやクィア・アクティヴィズム、クィア・スタディーズの担い手たちがキリスト教を含む宗教を敵視する原因にもなってきた。工藤氏はクリスチャンである自分から見ても「フェミニズムとかクィアの視座に立った時にキリスト教が敵として立ち現れてくることは至極もっともなこと」だと述べ、キリスト教がこうした文脈の中で警戒されたり価値のないものとみなされがちな現状を語った。

そのような両者の緊張関係の中でなお、キリスト教徒としての立場を崩さずに内部からキリスト教の家父長制や異性愛主義に抵抗しようとする営みがある。それがフェミニスト神学やゲイ神学、レズビアン神学、クィア神学などと呼ばれる思想潮流だ。工藤氏はまず神学の定義について、外側から客観的に宗教を研究する宗教学とは区別され、神やイエス・キリストへの信仰を前提とし、その信仰を内側から擁護するものであると一般に理解されていると説明した。フェミニズムと神学の結びつきは、記録に残る限りでは 1895 年に出版された『女性の聖書』にさかのぼる。この本は女性参政権運動に従事していた女性たちが共同で出したもので、聖書を根拠に女性の参政権を否定してくる人々に対し異なる聖書解釈をもって反論することを企図していた。工藤氏は「当時聖書を読む、解釈するということ自体が非常に限られたエリート男性だけの手に握られていた特権だったので、それを女性が侵したということ自体が本当にスキャンダラスなこと」だったと同書のインパクトの大きさを語った。時代がくだり、1955 年にはイギリスの司祭によって親同性愛的な神学書がはじめて書かれるが、ここには同性愛は精神的な疾患であるためそれを宗教的な罪とすべきではないというロジックが使われておりその時代の限界を見て取れる。1960 年代末からいよいよ本格的なフェミニスト神学と呼ばれる思想潮流が起こり、また 1970 年代以降から 90 年代にかけてゲイ・レズビアン神学が、そして 90 年代中ごろ以降はクィア・アクティヴィズムやクィア理論に影響を受けたクィア神学がそれぞれ立ち上がった。また見逃せない動きとして、フェミニスト神学の異性愛中心主義やゲイ神学に見られた白人ゲイ男性中心主義を批判的に受け止める形で 1980 年代末に生まれたレズビアン・フェミニスト神学の潮流もある。工藤氏はこれらは決して直線的に発展したわけではないと強調し、「例えば一人の神学者の中にもいろいろな要素が同時に見えるということもありますし、本当にさまざまに、らせん状的にお互いに影響を受け合いながら発展してきたのがこれらの性を扱う神学潮流だと言えると思います」とまとめた。

続けて工藤氏は、こうした神学潮流について説明する際に必ず聞かれることが二つあると言う。一つは「果たしてフェミニズムやクィアの視座とキリスト教神学というものが両立しうるのか」という問い。これは先述したようにフェミニズムやクィアにとって巨大な敵であるキリスト教を最終的に弁護するかたちをとる神学というものと、これらの視座が本当に並び立つのかという疑問から来ているものだ。もう一つは、「どうしてそんなひどい

宗教の中になお留まるんでしょうか、そんなに嫌なら出ていけばいいのに」という問いである。このなぜ留まるのか、という問いは外側からだけでなく、キリスト教内部の保守的な性規範を堅持したい側からも投げかけられると工藤氏は言う。この二つの問いを工藤氏は「これらの神学潮流にとってはずっと取っ組み合わなければいけないもの」であると語った。

それでは、こうした問いに実際にクィア神学はどのように取り組んでいるのか。工藤氏はクィア神学の内部にもさまざまな試みがあり多様性に富んでいるとことわった上で、これを大きく二つの方向性に分けて説明した。一つは、「本当のキリスト教を探す」という立場。もう一つは、キリスト教そのものの構築性に着目しそれを相対化しようとする立場だ。工藤氏によると、クィア神学の中で主流を占めるのは前者の立場であり、そこではキリスト教は本来女性差別や性的マイノリティへの差別に反対する立場を取る信仰体系であるという確信のもと、家父長制的・異性愛主義的な言説に反論することが試みられる。この立場の人々がまず着手しなければならないのが聖書解釈であると工藤氏は言う。それは保守的な性規範を保持しようとする人々が必ず聖書を引き合いに出してくるからである。例えば同性愛は罪であるという主張の根拠として用いられる部分が聖書には六か所あるが、これらに対してはフェミニスト批評やクィア批評の立場から丁寧な分析作業が行われ、いずれも詳細な反論が提出されている。また、そうした反論と同時に、キリスト教のさまざまな教えを考える教義学という分野でも教義の読み替えが行われてきた。一例として工藤氏はキリスト論を挙げ、キリストの人間としてのセクシュアリティや欲望に焦点を当てる立場や、キリストが政治犯として磔刑に処されたことに注目し、全く異なる社会のビジョンを示すアクティビストとしての姿をそこに見出す立場などがあることを紹介した。さらにキリスト教の性倫理の見直しも精力的に行われており、「友情」や「相互性」を関係性における一つの基準として提案するなど、男女二元論や男女相互論、生殖中心主義に則らないよりインクルーシブな性倫理のあり方が模索されてきたという。

このように主流のクィア神学の立場ではキリスト教本来のメッセージを探り、キリスト教こそがクィアであるという主張が成されてきたが、これらはキリスト教を擁護している点で従来の神学定義に沿った試みと言えると工藤氏は述べる。こうしたアプローチには同じ

キリスト教徒に向けて説得力をもって伝わりやすいという有用性もあるが、ともすればキリスト教への批判よりも肯定に傾いてしまいがちな危険性もあると工藤氏は指摘する。良きキリスト者として共同体に包摂されることを目指しているようにも見えるこうした立場が、主流社会への反抗を特徴とするクィアの視座を本当に備えているのか、クィアというもののラディカルさや政治性が足りていないのではないかと工藤氏は疑問を呈する。もう一つ工藤氏が問題視するのが、これらの護教的な言説が、キリスト教がグローバル規模で振りかざしてきた巨大な権力への批判になりえないばかりか、むしろそれを支えてしまう危険があることだ。「キリスト教とは本来クィアでいいものなんだという主張は、ともすればそうではない排他的で誤った他者というものとして、特に非西洋社会や非キリスト教社会にネガティブな価値を与えてしまうことになりかねない」と工藤氏は注意を促した。

このような第一の立場への疑問に重なるような二つ目の方向性が、キリスト教を人間によって作り上げられてきたものだと捉え、その構築性を暴いていこうとする立場である。工藤氏はこうした方向性の先駆者としてアルゼンチン出身の神学者マルセラ・アルトハウス＝リードを挙げる。アルトハウス＝リードの神学者としてのルーツには「ラテンアメリカ解放の神学」がある。これは 1960 年代にラテンアメリカ諸国のキリスト教徒の共同体から生まれた実践的な神学で、スペインやポルトガルなどによって同地域にもたらされたキリスト教が西洋帝国主義に染まっており、現在もなおグローバルな資本主義構造を支えていることを批判した。アルトハウス＝リードはこの神学潮流の中で鍛えられ、植民地主義や資本主義批判の立場を身につけていったが、その上で彼女が解放の神学に欠けているものとして挙げたのが性規範への取り組みだった。アルトハウス＝リードは、植民者たちが持ち込んだキリスト教は、どのような神を信じるべきかという言説だけでなく、どのような性的な振る舞いが正しいかというセクシュアリティの規範をももたらし、それが植民地支配の重要な一角を担ったと指摘する。さらに彼女は、現在もラテンアメリカには植民地主義的な性規範とそれに基づく言説が根強く残っており、キリスト教の中の植民地主義に取り組むことはすなわち異性愛規範に取り組むことなのだと論じた。工藤氏はこのようにクィア神学がアルトハウス＝リードにとっては植民地主義や資本主義の問題と不可分に結びついており、そこに彼女のユニークさがあると語った。

アルトハウス＝リードの実践する神学とはどのようなものか。工藤氏は例として、アルトハウス＝リードがイエス・キリストを模範として美化するのではなくむしろ自分たちと全く同じ人間として捉えようとすることを挙げる。彼女はラテンアメリカの女性たちと一緒に聖書を読みながらイエスの行動についてその問題点も含めてオープンな語り合いを行っていたという。また性規範に関しても、従来の家父長主義的なそれに代わる新しい基準を提示しようとはまるでしないという。代わりにアルトハウス＝リードが行うのが「キリスト教の整然とした聖なる言説の中では語るべきではないとされてきたような、みだらで下品な経験、あるいは欲望の言語を使って、神やキリストやマリアを語る」ことである。工藤氏は、アルトハウス＝リードがこうした実践を通して再考しようとしているのはキリスト教というもの自体への向き合い方ではないかと分析する。既存のキリスト教にあっては、すでに確立された世界観や生き方の指針のパッケージがありそれを下々のものが受け入れることが信仰だという考え方が取られてきた。しかし、アルトハウス＝リードはこうしたすでにある教えや規範によって自分たちの生が意味付けられるという順序を拒否して、複雑で流動的で系統立てられない現実から出発しようと常に説く。工藤氏はそこで「一部の特権者たちだけが握ってきていた神やキリストを語る資格、それを自分たちの手に取り戻すということが行われている」のではないかと指摘する。アルトハウス＝リードは実際に、クィア神学とは常に一人称で自分の経験に基づきこれまで下品でみだらとされてきたような問いを立てて神を探すことなのだと言い、自らの神学を「インディーセント・セオロジー（下品な／みだらな神学)」と名づけている。彼女の神学を工藤氏は「アーティスティックでクリエイティブ」と形容し、「既存の神学書、論理だった、系統だったアカデミックな言語で語られていて、最後にキリスト教の良さに着地するようなキリスト教の神学の語りとは全く違う語りが展開されて」いると説明した。

工藤氏はここで神学という言葉に立ち戻り、原語のギリシア語では神学は「テオロギア」と言うが、これはテオス＝神とロギア＝語りを合わせたものであり「神語り」と訳せると説明した。神学を学問というより神についての語りだと考えた時、それは「むしろ人間の手によって作り上げられて固定されてきた正当な教義の枠を超え出て、もっと自由に思いつくままに語る神語りとしても捉えられるのではないか」と工藤氏は言う。時にそれは既存のキリスト教の擁護を目的とするどころか、「むしろそれを内側から揺るがして破壊し

ていこうとするようなそういう衝動をもった語りにもなりうる」。工藤氏はここに、アルトハウス＝リードの神学とガヤルド氏のアート作品との共通性を見出す。両者はいずれも大きな構造に対峙しながら、それと全く同じ強度の新しい規範を作るのではなく、セクシュアリティや欲望に根ざしたエロティックな表現を使うことでむしろその内部から何かを揺るがそうとしていると工藤氏は見る。ガヤルド氏の作品を見て、アルトハウス＝リードが本当にやりたいことを示すにはアカデミズムの言語よりもアートのような表現の方が目的にかなっていたのではないかと思った、と工藤氏は振り返った。

最後に工藤氏は、冒頭で提示した二つの問いに立ち返って講義の内容を整理した。まず、なぜキリスト教の内部に留まる必要があるのかという問いについては、それぞれの立場や環境に応じて三つほどの動機・理由が挙げられると工藤氏は言う。一つ目は、本来のキリスト教が現実の差別構造へ立ち向かうことを促すものであるという確信から、自分たちこそがキリスト教を回復させるのだという信仰的な動機。二つ目は、既存のキリスト教への抵抗を意図した時に、あえて内部に留まることによって、今あるヒエラルキーを支える人々にとって不愉快で危険な存在になれるという理由。三つ目は、特にキリスト教思想とその性規範が隅々までいきわたっているような社会では、そもそもキリスト教から出ていくという選択肢がないという理由である。工藤氏は「キリスト教が本当に現実の生の避けがたい一部になっている」場合があり、「そこと取っ組み合うしかない人たちがたくさんいる」ことを指摘した。もう一つの、フェミニズムやクィアの視座とキリスト教が両立するのかという問いに対しては、クィア神学の第一の立場の人々にとってはむしろキリスト教はこうした視座を体現するものなので、両立しうるという答えになるだろうと工藤氏は言う。反対に第二の立場を取る人々はこの問いに直接答えることはせず、ではそこで言う「キリスト教」とは何なのか、という問いの立て方をする。つまりキリスト教を常に多様な形で実践され続け、変容し続ける行為遂行的なものとして捉え、それをフェミニズムやクィアの視座から問い続ける営みを神学として提示する。工藤氏は「絶対と思われているものの構築性をあらわにすること、そのために内部から例えば不遜に語り直すこと、それによって揺るがそうとすること、これが一つのクィア神学の可能性として残されているんじゃないか」と述べ、講義を締めくくった。

その後に行われたクロストークでは、山田創平氏がまず HIV／AIDS の支援現場で多くのクリスチャンに出会ったことからキリスト教に興味とシンパシーのようなものを持つようになった経緯と、現実の教会に行ってみて感じた違和感を語り、二つの感情の間で揺れていた際にクィア神学の存在を知り衝撃を受けたと話した。山田氏がクィア神学の第一の立場は中心と周縁の構造で言えば中心へと近づこうとするもの、第二の立場は周縁に留まったまま言葉を発しようとするものだと理解したと話したのに対し、工藤氏はアルトハウス＝リードもまた中心になりたがるクィア神学の傾向を批判していることを指摘した。その上で工藤氏は、キリスト教内部での同性愛者や女性に対する迫害は時に命に係わるものであり、「正しいキリスト者として認めてくれ」という訴えは「殺さないでくれ」と同じくらい切実な言葉である場合も多いと話し、こうした主張を論理だけに基づいて批判することはできないと補足した。続いて山田氏がキリスト教会の変化の遅さについて質問したのに対し、工藤氏はキリスト教の規範を聖化し世俗の人権に関する議論と切り離そうとする傾向が強いこと、また社会一般とは異なる価値観を保持することに宗教的アイデンティティを見出す人もいることを指摘し、一朝一夕には変化は起こらないのではないかという見立てを語った。第 2 講目で講師を務めた菅野優香氏からは、クィア神学において構築主義を徹底させていくとキリスト教そのものが成り立たなくなくなるのではないかという疑問が出された。これに対して工藤氏は突き詰めれば崩壊すると思うと話し、構築主義的な認識論や世界観とキリスト教をはじめとするいわゆるアブラハムの宗教が両立しにくいことを指摘した。質疑応答では受講者からも「構築主義の立場に基づくクィア神学は自分の足場を崩していくようなところがあると思うが、それをどうやって引き受けているか」という質問が出された。これに対し工藤氏は時々自分が何をしているのかわからなくなると率直に葛藤を述べた上で、「でもやっぱりもう戻れないんですよね。本質的なものとか固定されたものとか、そういうところに戻ることが自分にとってユートピアではない。ずっと不安で、ずっとおろおろしていて、正解がないって問い続けること自体を私は今の自分のクリスチャンとしての生き方だと思っているところがある」と答えた。

作成＝吉田守伸　写真＝仲川あい